

# 星野貞一郎先生のご退職によせて

社会福祉学科主任 稲葉 一 洋

平成8年立正大学に6番目の学部として、社会福祉と人間福祉の2学科から成る社会福祉学部が開設された。そこで初代の学部長を勤められていた星野貞一郎先生が、この春めでたく古希を迎えられ、定年ご退職される。

ご縁あって星野先生が群馬大学より、立正大学短期大学部に移られたのは今から7年前、平成4年4月のことであった。その翌年には、早くも社会福祉学科長に推挙されているが、丁度その時期、短大改組・四大化の動きも本格化するところとなり、先生は社会福祉学部発足のまとめ役、推進役として中心的役割を果たされたことは周知のとおりである。学部開設後も、学部長として社会福祉学部の基盤形成や運営、学内行政に尽力され、ご多忙の日々を送られて、今日に至っている。

星野先生は群馬県赤堀町のお生まれである。そのご性格も温厚篤実にして義理と人情に篤く、その意味からも生粋の上州人といつてよいお人柄といえよう。若い時期に苦学され、先生の研究者としてのスタートはかならずしも早くはない。向学心に燃え、刻苦勉励の甲斐あって昭和37年に早稲田大学大学院（社会学専攻）を修了されたのは、30歳をいくつか超えてのことであった。大学院では、わが国で多くの社会学者を育て、後に立正大学文学部でも教鞭をとられた故武田良三博士の薫陶を受けているが、今に至る先生の学的ルーツは、ここに胚胎しているといつてよいであろう。

大学院修了後は群馬県庁職員として児童相談所、衛生民生部の厚生課や婦人児童課など、福祉行政全般に亘って10年近くお勤めになっている。この実践現場の日々が社会福祉への知的・実践的な関心を培って深化させ、やがて社会福祉研究の世界へと足を踏み入れる契機となっていくのである。先生が大学で研究者としての途を歩まれるのは、昭和46年に駒沢大学文学部の招聘により始まるが、それは齢すでに不惑をすぎたことでもあった。行政畑から転じての新天地の駒沢大学では、社会学と社会福祉を担当されたが、学生の教育・指導にも熱心に取り組み、就職の面倒見もよい教育者としての一面をよく示されている。また研究者としても、多年の研究と福祉実践によって培った蓄積をバネに、その成果を形にまとめ矢継ぎ早に世に送り出されている。ちなみに、駒沢大学時代の5年間に著書のみでも、単著『概説法社会学』（学文社）をはじめとして、編者として編集全般を担当した『社会福祉調査』（ミネルヴァ書房）と『心身障害児学入門』（協同出版）の2冊を数え、さらに共著の『社会福祉発達史』（ミネルヴァ書房）、『社会学概論』（学文社）も著されている。昭和51年4月に刊行の『社会福祉概説』（編著、有斐閣）なども、この時期に執筆されたものである。

やがて昭和51年には、ご両親の住まわれる郷里の群馬大学教育学部に奉職されることにな

り、駒沢大学での生活も5年でピリオドが打たれている。群馬大学では社会学、社会福祉、社会病理学の担当教員として学部学生の指導に当たり、平成2年からは大学院の教育学研究科でも社会福祉学を担当されている。この群馬大学時代には、群馬県社会福祉審議会委員、群馬県林業会議委員をはじめとして、現在に至る縁を守り育てる群馬県連絡会議・会長や群馬県職業能力開発審議会委員・会長など、墳墓の地群馬での貢献に意を注がれている。駒沢大学より移籍されて平成3年まで群馬大学には16年間在職されたが、この間群馬県においても地域・行政課題としてクローズアップされてくる高齢化や過疎の問題、さらに進んで林業労働者の問題にも並々ならぬ関心を寄せられ、これらの実証研究にも力を入れられている。この時期の著作には『障害福祉論入門』（有斐閣）、『福祉社会学』（ミネルヴァ書房）、『障害者福祉論』（圭文社）の3冊を編著で、また『社会学』（学陽書房）、『アメリカの社会保障』（東京大学出版会）の2冊を共著で執筆されている。

立正大学に移籍して今年までの7年間は、ほぼ短大改組と社会福祉学部の発足、学部完成年に向けての取り組みの時期と重なり、先生は社会福祉学科長、社会福祉学部長予定者、そして学部長と多忙多難を極めるなか重い職責を果たされてきた。そうした多忙な日々の中でも、仏教社会福祉の理念や役割にも意欲的な関心を示され、理論面のみでなく実証的な接近にも務め、全国の寺院を母集団にしたサンプリング調査を基に『仏教社会福祉に関する実態調査報告書』（仏教社会福祉研究会）をまとめられている。また高齢社会の到来により、「保健・医療・福祉」の連携や統合化が強く求められている今日の状況を踏まえて「保健医療福祉」を一つの統一した概念で捉え、社会的アプローチを試みた『保健医療福祉の社会学』（編著、中央法規出版）も昨春刊行をみている。さらに同年秋には三年の歳月をかけて、いわば先生が心血を注いで想を練り推敲を重ねられ、その代表的著作の一つに数えられてよいであろう『社会福祉原論』（有斐閣）を出版された。社会福祉領域においても原論の名称を有する著書は多くないが、単著のものとなると一層少ないなかで、社会福祉の原理や理念、仕組み（構造と機能）を体系的に論じ、福祉専門職従事者の職業倫理の体得を意図として執筆されている。

星野先生の略歴を辿ってきたが、先生が社会福祉や社会学を専攻する研究者として広く知られる方であることは、改めていうまでもない。その著書や論文に脈々として流れる社会的な発想や枠組み、方法への関心や社会事象への飽くことなき探求心は、社会学者としての、また社会福祉の理論や現実への洞察力と豊富な知識は、先生が社会福祉研究者としての一面をよく示しているものといえよう。しかしなによりもヒューマンな立場からの、社会福祉への社会的アプローチにこそ、その本領が遺憾なく発揮されているように思う。そうした先生の研究業績の一端を、私なりに垣間みることにしてみたい。

従来より社会的な発想や分析枠組み、方法を用いて社会福祉現象にアプローチを図り、その解明や分析を行う研究者は多い。しかしそうした社会福祉現象に対する社会的研究に理論的・方法的な整理検討を加え、福祉社会学として一冊にまとめた書物となると、わが国でも竹内愛二著『実践福祉社会学』を嚆矢として、松原治郎や副田義也、大嶋謙一などの各氏に留ま

り、類似の書物に拡げてもそう多くはない。そうしたなかで先生は、十数年前に同志社大学の渡辺武男教授との編著『福祉社会学』を世に送り出し、今でも社会福祉に関する社会学的研究、あるいは連字符社会学としての福祉社会学の代表的著作となっている。本書の刊行は、社会学による社会福祉事象へのアプローチを研究の基本とされる、先生ご自身の学問的・方法的な自己確認といってもよい営為にちがいない。

周知のように、社会事象の分析と解明のためのデータ収集の手法として「社会調査」がある。先生はこの社会調査を巧みに用いた実証的研究にも優れた業績を残されているが、昭和57年に発表し、全国的に反響を巻き起こした論文「林業労働者の生活実態と社会的支援の一方」や平成元年の「過疎地域における老人問題」などは、その代表的なものといえよう。これらの実証研究が堅固な理論的枠組みや鋭い問題意識に支えられたことは言うまでもないが、方法としての調査理論や技法なしには不可能であったにちがいない。そして実際、昭和40年代後半の『社会福祉調査』（児玉幹夫教授との共編）が長く福祉調査の基本文献と見なされるなど、社会調査それ自体に関する著述も少なくない。

今日社会福祉の転換も急進展を辿り、かつての有力な福祉理論や用語も色褪せて見えることが日常化している。星野先生は昭和40年代後半、これまで社会福祉の主体と捉えられていた政策主体と実践主体（星野先生の用語では「援助活動主体」）に、新たに「運動主体」を加えた主体論を、副田義也教授とほぼ同時期に提起されている。それは社会福祉の主体の範囲を広げ、いわゆる対象が主体へ転化する道筋や論理を用意した点に発想の斬新さがあっただけではない。福祉実践の担い手を意味していた実践主体を援助活動主体に置き換え、やがて広く一般化することになる「援助活動」といった用語を、いち早く採用した先生の学識と洞察力に支えられた先見性をも十分に証明していよう。

このように先生は優れて学究の人ではあるが、同時にハンディキャプトや福祉現場への配慮や思い入れにも深いものがある。現在2000年に開設予定の老人福祉施設（立正たちばな福祉会）の建設や開設に向けての準備も本格化しているが、大学が福祉施設を運営することに不屈の意欲と熱意で取り組まれた学部長としての星野先生の存在抜きには、その実現化はなかったであろう。これらのこともお若い時期の福祉の現場経験とも強い関連があるのだと考えると、まさに福祉マインドは、一朝一夕にならずに実感せずにはいられない。

この春（1月5日）先生には古希を迎えられ、3月末を以て本学の学部長・専任教授の職を離れられるが、幸い健康にも頗る恵まれておいでであり、来年度も非常勤講師としてご出講願うことになっている。先生は最近の著書『社会福祉原論』でも、この書を足場にさらに精進を積み、よりよい書物にして世にだしたい、と並々ならぬ学的意欲を示されている。ますますお元気でご活躍されることを、衷心より祈念したい。